

熊本城大天守の屋根に見事復活—— 威風堂々の鯨に想いを込める鬼師親子

熊本市民が、復興のシンボルとして心の拠り所とする熊本城。復旧工事が進む中、足場が外れた大天守に昔と変わらない姿の鯨が現れた時、思わず胸を熱くした人も多かったのではないのでしょうか。「一生のうちに何度も作れるものではない。貴重な経験です」と語る鬼師・藤本康祐さんに、鯨の復活について話を聞きました。

残っていた図面と鬼瓦が後押し 先代の鯨を目標に復元へ

「『どこかに引っかかって、無事だったらいいな』と思っていたんですけどね」。熊本地震後、テレビに映し出された痛々しい熊本城を目にした時の心情を話してくれた鬼師・藤本康祐さん。築城400年記念として今は亡き先代が作った大天守の鯨は残念ながら損壊しており、同じく小天守の鯨も落下



していました。そこで藤本さん親子に、復元の打診があったのです。「父が作った鯨の資料は手元に残っていたし、見本として熊本市博物館に收藏されていた江戸時代の鯨も別の場所で無事だったので、『この2つがあれば再現できます』とお返事しました」。地震から約半年後、大天守の鯨を康祐さんが、小天守の鯨を修悟さんが引き受けることに決定。そこから、鯨の復活に親子で心血を注ぐ日々が始まりました。



熊本市民の祈り・願いとともに 多くの課題を乗り越えて無事完成

まず、見本の鯨を特殊なカメラで撮影して、より詳細な図面を製作。次に宮崎県と島根県の土を配合し、以前と同じ高強度の土づくりを始めました。1～2カ月の乾燥後に形成と彫刻を行います。「完成時に約10%小さくなることを考えながら作らなければなりません」と難しさを語る康祐さん。また、焼成の時にも苦労がありました。「直接火が当たって割れないよう、鯨を取り囲むようにレンガを置きました。まだ余震もある中、5日間かけて焼きあがった時にはホッとしましたね」。そうやって職人魂を掛けた2本の新しい鯨が今春、大天守の屋根に無事設置されたのです。家内安全などの願いを込めて、神聖な場所に上げる鬼瓦。藤本さん親子の鯨が、これからも熊本の街を見守り続けます。

HUMAN ～復興に携わる人～

宝飾時計店を支える顧客&仲間との絆

たかやなぎ たかひろ

高柳 隆大さん(ソフィ・タカヤナギ 代表取締役社長)

「お客様からのご依頼に支えられました」

下通りアーケードで宝飾時計店を営む高柳さん。熊本地震では「一瞬、廃業も頭をよぎりました」と話すほど被害が大きかったものの、本震からわずか4日後には営業を再開しました。「実は修理のお問い合わせが多くて、『待っていてくださるお客様がいるのならば』と、どこよりも早く再開を決めました。亡きご主人の腕時計を携えて修理依頼に来られた女性が、動くようになった時計を手に『おかえりなさい』と呟かれていたのを見て、修理をやってきて本当に良かったと思いました」と高柳さん。また下通アーケード改修委員会実行委員長でもあるため、地震直後からアーケードの修理にも着手。高所作業車を手配して自ら警備員を買って出るなど、迅速な対応に尽力しました。「当店も含めて、地元の店が長く続いて欲しいですからね。商売仲間で結束して、『また今から盛り上げるぞ!』という気持ちになりました」と当時を振り返ります。現在は全壊となったビルの再建のため、程近い仮店舗で営業中。多くの顧客の声を力に、年内の全面再オープンを目指しています。



ACTIVITY ～復興支援～

「情報発信」をとおして 熊本と県外をつなげる

デジタルマーケティングを活用した企業支援や地域プロジェクトに関わるクマベイス代表の田中森士さん。田中さんは本業のかたわら、自分の強みをいかし、被災地の現状を県内外に伝える「情報発信」に力を注いでいます。「熊本に関心を持っている人は多く、何かしたいと思ってくれている」と語ります。地震から2年以上たった現在も、熊本と県外をつないでいます。

具体的には？

- 毎日新聞での連載やYahoo!ニュースでの定期的な情報発信
- 県外で被災地の現状を伝えるイベント登壇
- 熊本と県外のお互いに助け合うネットワークづくり

「震災直後に比べると県外に情報発信をする機会はぐっと減りました。いまでも『必要とされれば出来る限り足を運ぶ』というスタンス。被災地の現状や、その都度直面している課題を伝えています。同じ被災地ですが、たとえば熊本で得られた知見と東北で得られた知見はまったく違います。こうした情報を蓄積することで、『災害に強い国づくり』につながっていくと考えています」



田中森士さん(クマベイスCEO)
県立高校の常勤講師、産経新聞記者職を経て
Uターンし、クマベイスを創業



宮城県気仙沼市で開催されたイベントで、「震災後に生まれたコミュニティとそれぞれの関わり方」について講演